

序 章

4

何が「家庭での学習」を促すのか

—親子関係を中心に考える—

木村 治生

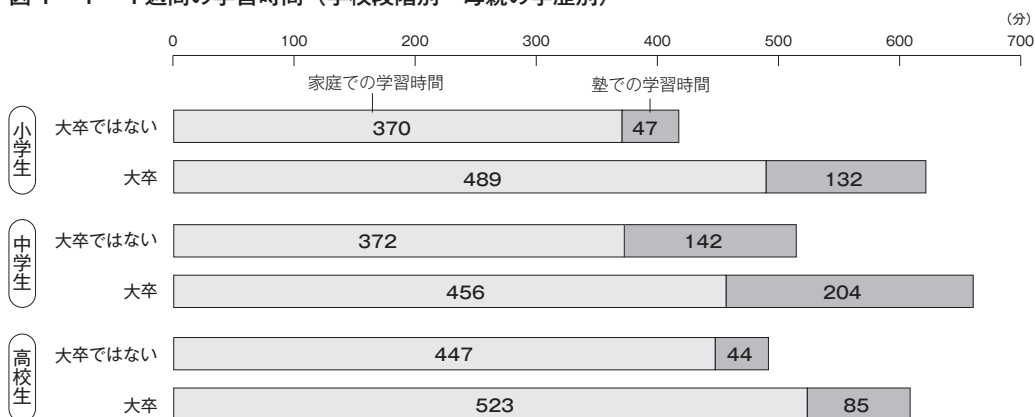
●家庭的な背景が学習に与える影響

家庭環境と子どもの学力が関係していることは、これまで多くの研究で実証されてきた（たとえば、耳塚2007、浜野2009など）。社会階層が高い保護者は学習の大切さを子どもに伝え、積極的に学校外の教育に投資を行う。その結果として、子どもは高い学力を獲得する。今回の調査は子どもを対象としたものであるため、階層の指標になる変数は父母が大学（短期大学を含む）を卒業しているかどうかくらいしか聞くことができている。しかし、こうした変数で

も明確に子どもの学習の差になって表れる。

図4-1は、1週間トータルの学習時間の平均を、母親の学歴別に示したものである。これを見ると、母親が大卒かどうかで、1週間あたり2時間から3時間30分程度の差が生じている。小学生ほど差が大きいこともわかる。父親の学歴別にみてもほぼ同様の結果である。こうした学習行動の違いは成績にも影響を与え、父母が大卒のケースのほうが成績（自己評価）も「上位」である割合が高い。このように、保護者のバックグラウンドが、何らかの形で子どもの学習に影響を与えていることは間違いない。

図4-1 1週間の学習時間（学校段階別・母親の学歴別）



注1) 「大卒」は「お母さんは大学や短期大学を卒業している」を選択したケース。

注2) 「家庭での学習時間」は、「ほとんどしない」を0分、「15分くらい」を15分のように時間に換算したのちに、平日の学習時間を5倍、休日の学習時間を2倍し、これらを合計して1週間の時間を算出した。

注3) 「塾での学習時間」は、通塾していない者を0分とし、通塾している者については週あたりの日数と1回あたりの時間を乗じて1週間の時間を算出した。

●親子の会話の積極的な意義

それでは、学歴が高い保護者はどのような働きかけを子どもにしているのだろうか。

今回の調査から明らかなのは、親子の間での会話の違いである。父親と母親のそれぞれについて、「学校のできごとについて」「勉強や成績のことについて」「将来や進路のことについて」「友だちのことについて」「社会のできごとやニュースについて」の5つの話題をどれくらい話しているかたずねた。その結果を保護者の学歴別にみると、次のことが指摘できる（図表は省略）。

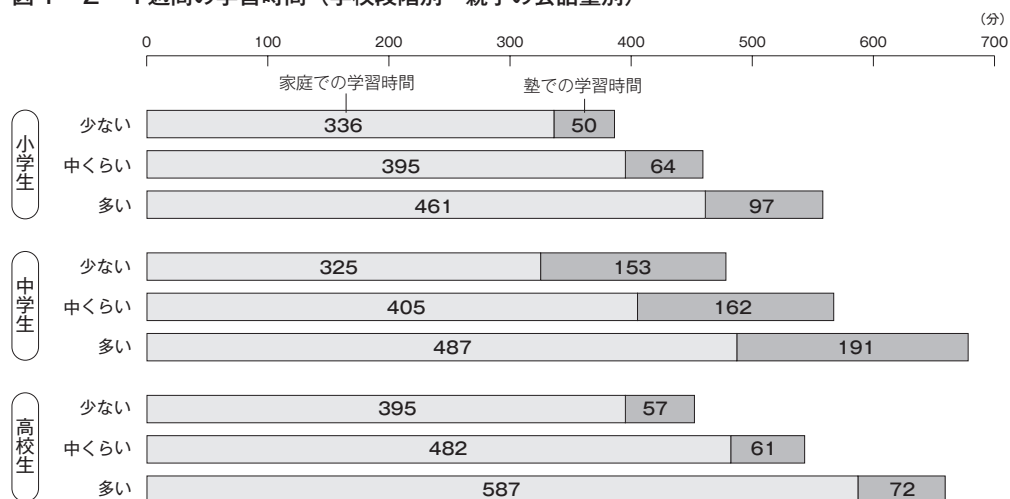
第1に、父母のいずれも「大卒」のほうに会話が多い。学歴が高い保護者は、子どもへの働きかけが積極的である。第2に、その差は父親のほうに大きく表れる。母親は学歴に左右されずに会話が多いが、父親は「大卒ではない」ケースで会話が少ない傾向がみられる。第3に、その差は小学生に大きく、高校生になると縮小する。「大卒」の保護者は、子どもが小学生のうちに積極的に働きかけるためである。このように、「大卒」の保護者は子どもの発達によって関係性

を変えている可能性がある。第4に、会話の中身も異なる。「大卒」に多いのは「勉強や成績のことについて」「将来や進路のことについて」「社会のできごとやニュースについて」などで、「学校のできごとについて」や「友だちのことについて」などの日常的な会話は差が小さい。

このような働きかけの違いは、学習行動にどのような影響を及ぼすのだろうか。図4-2で、親子の会話の量によって学習時間がどれくらい異なるのかを確かめてみよう。ここでは、父親との会話と母親との会話を得点化して合計し、会話量で「少ない」「中くらい」「多い」がほぼ均等に三分されるようにグループ化したうえで、それぞれの学習時間を算出した。ここからは、親子の会話量が多いほど、長い時間を学習に費やす傾向が読み取れる。この傾向は、小学生から高校生まで同様である。

会話が豊かな家庭は子どもの精神的な安定をもたらし、より学習に向かいやすくする。また、会話そのものが知的な情報や学習の価値を教えたり、学習の目標や進路について考えたりする機会をもたらし。そうしたことが、学習行動に結びついているのだろう。

図4-2 1週間の学習時間（学校段階別・親子の会話量別）



注1) 会話量は、父親との会話（5つの話題）と母親との会話（5つの話題）のそれぞれについて、「よく話をする」を4点、「ときどき話をする」を3点、「あまり話をしない」を2点、「ぜんぜん話をしない」を1点として合計し（10～40点に分布）、これを各グループがほぼ均等になるように「少ない」「中くらい」「多い」の3グループに分けた。

注2) 学習時間の算出方法は、図4-1と同じ。

●家庭教育への示唆

ところで、今まで述べてきた結果が家庭教育の実践においてより重要な示唆を含んでいると思われるのは、親子の会話と子どもの学習の関係が、保護者の学歴を問わずに表れる点である。詳細については煩瑣になるので省略するが、子どもの成績を従属変数にして成績に影響を及ぼす要因についての重回帰分析を行ったところ、親子の会話量は保護者の学歴と同等かそれ以上に成績を規定していた。

もちろん、さまざまな要因をコントロールしても学歴の影響は残っていて、高い学歴を有する保護者のほうが有利である点は間違いない。これは、同じ会話の量であっても学習にかかわる内容が多くなるためだろう。しかし、保護者の学歴を統制しても親子の会話量の効果は強く残った。「当たり前」と思われるかもしれないが、子どもとの関係の築き方によっては保護者自身のバックグラウンドを乗り越えられるということであり、家庭教育に与えるインプリケーションは大きいと考えられる。

●親子関係が学習行動に与える影響

とはいえ、単純に会話の頻度が高ければそれでよいのか、という疑問がわく。そこで、親子関係のあり方がどのように学習に影響しているのかを確認してみることにした。

親子関係についてたずねた質問は、「勉強を教えてくれる」「いいことをしたときにほめてくれる」「悪いことをしたときにしかってくれる」「困ったときに相談にのってくれる」「あなたのことを大人として扱ってくれる」の肯定的な5項目と、「いつも『勉強しなさい』と言う」「何でもすぐ口出しをする」「約束したことを守ってくれない」「考えをおしつける」「お父さんとお母さんの意見が違って困る」の否定的な5項目である。それぞれの項目に対して選択をした子

と選択しなかった子で、学習時間がどう異なるのかを検討した。その一例として、典型的な傾向を示す項目の結果を図4-3に示そう。

①は、「困ったときに相談にのってくれる」を選択した子（「はい」と表示）と選択しなかった子（「いいえ」と表示）に分けて、家庭での学習時間と塾での学習時間を示したものである。このように肯定的な親子関係の項目では、学校段階を問わず「はい」の子どもが家庭での学習時間が長い。その一方で、塾での学習時間は「いいえ」の子のほうが長いか、「はい」と「いいえ」で大きな差がみられないかのいずれかであった。肯定的な親子関係が家庭での学習を促進する可能性をうかがわせる。

これに対して②は、「何でもすぐ口出しをする」を選択した子（「はい」と表示）と選択しなかった子（「いいえ」と表示）に分けて、同様に学習時間を算出した。この図からは、小学生では「はい」のほうが、高校生では「いいえ」のほうが家庭での学習時間が長いことがわかる。口出しが多いことは、子どもが小学生のうちには家庭での学習を促すが、高校生になると必ずしもそうではない。さらに、「はい」の子どもは学年を問わず、塾での学習時間が長い傾向がある。ここに示したように、否定的な親子関係は、家庭学習にはプラスの効果が無かったり、子どもの成長段階によってはマイナスに作用したりすることがあるようだ。

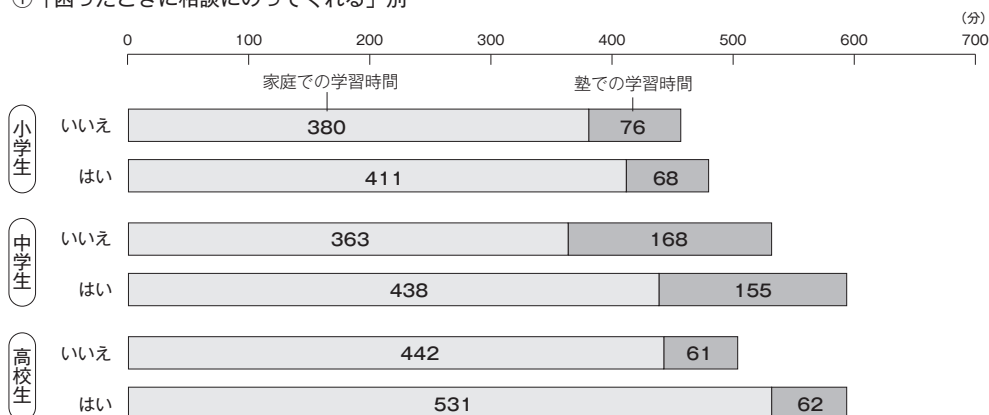
●家庭での学習を促す親子関係とは

以上、親子関係のあり方と学習行動（ここでは家庭での学習時間と塾での学習時間）について述べてきた。最後に、家庭での学習を促す親子関係について、今回の分析から得られた知見をまとめておこう。

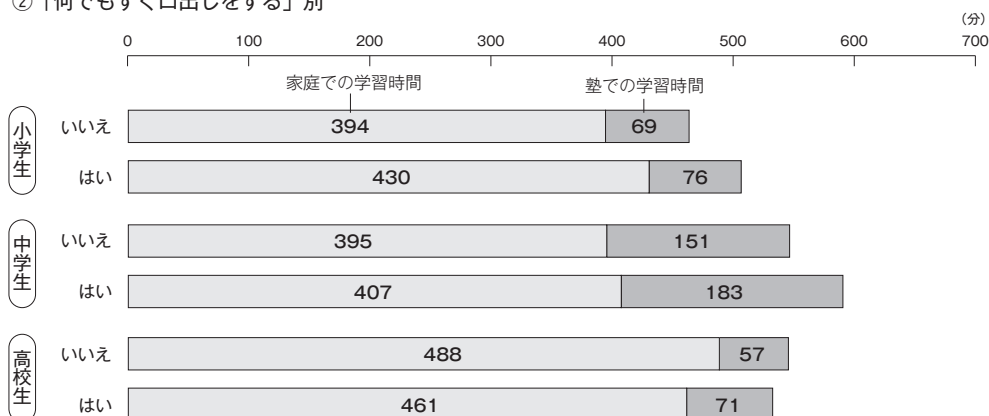
第1に、会話量の多さに示されるように、親子間のコミュニケーションが密なほど家庭学習

図4-3 1週間の学習時間（学校段階別・親子関係別）

①「困ったときに相談にのってくれる」別



②「何でもすぐ口出しをする」別



注1) 「はい」はそれぞれの項目を選択した子ども、「いいえ」は選択しなかった子どもを示す。

注2) 学習時間の算出方法は、図4-1と同じ。

の時間が長い。親密な親子関係は、子どもの学習にプラスに作用する。第2に、ベースとなるやりとりは肯定的なものが望ましい。肯定的な親子関係についての項目では、それを選択した子の家庭学習時間が一貫して長かった。第3に、否定的な親子関係についての項目（とくに過保護や過干渉を示す項目）では、学習時間の表れ方が学校段階で異なっていた。親密であることがよいといっても、関係性のあり方には注意しなければならない。密着した関係は、子どもが小さいうちは有効でも、子どもが成長した後は効果がない可能性がある。家庭で学習できる力を育てるには、発達によっても関係性を変化さ

せる必要があるといえそうだ。

近年、子どもに対する親や教師の関与が高まり、子どもが自立的に学習する力が弱まっているのではないかということが危惧されている（木村2009）。家庭での学習は、そのままイコールで自立的な学習とはいえないかもしれないが、少なくとも学校や塾のように場の拘束を受けず、自分で学習をコントロールすることが求められる。そうした自立的な学習能力を育てるために、家庭での学習をどう設計し、周囲の大人がどうかかわるべきか。今、そのことを真剣に考える必要があると考える。

序 章

【参考文献】

- 浜野隆 2009 「家庭での環境・生活と子どもの学力」『教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書』64-75頁、ベネッセ教育研究開発センター。
- 木村治生 2009 「学校でなければできない学びとは」『教育研究』第64巻3号、18-21頁、社団法人初等教育研究会。
- 耳塚寛明 2007 「小学校学力格差に挑む だれが学力を獲得するのか」『教育社会学研究』第80集、23-39頁、東洋館出版社。